

助産師として、 反省と展望をもって読みたい

『陣痛促進剤 あなたはどうする』
陣痛促進剤による被害を考える会編著

芦田 千恵美 大谷助産院助産師

本書は『病院で産むあなたへクスリ漬け出産で泣かないために』(’95年)の全面改訂版である。「陣痛促進剤による被害を考える会」が発足してから15年。地道な活動によって陣痛促進剤被害は徐々に社会問題として認知されるようになったものの、未だに悲惨で重篤な被害が起きている。その現実を変え、これ以上被害を出さないことを強く願ってこの本は編集された。

被害事例を読んでいくと、自分自身の病院勤務の頃が思い出された。「予定日超過」のため陣痛誘発を試みたが、途中で胎児の状態が悪くなり帝王切開になったケース。順調に來ていた陣痛の波が途中から間延びしたため促進剤を使って分娩に至らせたケース等々。どれも幸いにして母子共に「無事」にお産は終了した。けれどもそれは、もしかしたら危機一髪、すれすれのところで救われた「無事」だったのかもしれない。いや、きっとそうだったのだろう。病院の中では陣痛の誘発も促進も日常的医療処置の1つになってしまった現在、医療者の薬に対する感覚の鈍麻が事故に繋がったのは事実であろう。しかしそれ以上に問題なのは、お産にかかわる医療者の非人間的なありようなのではないか。そこには産む人や生まれてくるいのちへのいたわりや優しさ、尊厳といったものが感じられない。もっとも大切なものが置き去りにされているのだ。医師、看護師、そして助産師はそれぞれの立場で何をどうすべきだったのか、悲惨な被害の実態を読み進むうちに自ずと答えが見えてくる。

本書の持つもう1つのポイントは、タイトルの「あなたはどうする」の部分である。産む人自身が、陣痛促進剤の、そして他の医療被害に遭わないために、さらには自分にとって満足いくお産をするために知っておくべきことや病院選びのためのチェックポイントについて具体的に書いてある。病院で出産しようと考えている人は大いに活



『陣痛促進剤 あなたはどうする』
陣痛促進剤による被害を考える会編著
定価：本体 1,500 円＋税，さいろ社，2003 年

用してほしい部分である。

「考える会」代表の出元明美さんが被害に遭った1年後の1985年、私は第1子を出産した。当時私はまだ助産師ではなかった。お産についての知識も気持ちもいまいかげんで「もし何かあったら……」ただそれだけの理由で職場の近くの総合病院を選んだ。入院してからどんな処置が待っているのか、産んだ後、赤ちゃんとどんなふうに入院生活を送るのか、まるで考えていなかった。「子宮口を柔らかくする」注射もされた。陣痛促進剤も使われた。何の疑問も持たず、されるがままの病院任せのお産だった。被害に遭わなかったのはラッキーだったとしか言いようがない。だから1人でも多くの女性に「あなたはどうする？」の声が届いてほしい。

「自然の仕組みで母子が分泌する子宮収縮ホルモン等は、最終目的が健康な赤ちゃんの出産であることを知っています。しかし、不必要に投与された陣痛促進剤は、陣痛を強めるばかりでその最終目的を知りません」。この指摘は、陣痛促進剤の存在意義そのものを鋭く問いかけている。薬や医療の介入がなくてもたいいのお産はうまくいく。正常と異常を見極め、適切に対処できる医療者、とりわけ助産師がそのキーパーソンなのだと思う。深い反省と自立的展望を持って、すべての助産師にこの本を読んでもらいたい。

(あしだ・ちえみ)